

ドキュメンタリー映画「空想の森」監督

田代 陽子さん (41)

幸せ…質素でも豊か



映画監督としての初作品

は、農村に生きる人々の日常を描いたドキュメンタリー映画「空想の森」だ。舞台は酪農と林業が基幹産業の北海道新得町。質素だけでなく豊かな食卓、草や大地と格闘する農家、悩みを抱えながら力強く生きる家族を描いた。「物やお金でしか



満たされない現代社会に、本当の豊かさや幸せを考える機会になれば」と静かに訴える。
本州から新得町に入植し

たしろ・ようこ 1967年東京都生まれ、41歳。

ワーキングホリデー制度でカナダに滞在した後、北海道帯広市でタウン誌発行会社就職。96年、新得町で開かれた「空想の森映画祭」でドキュメンタリー映画に出会う。藤本幸久監督の映画「森と水のゆめ」「闇を掘る」にも携わる。2002年から自前で作品を撮影し始める。

た2家族の農的な暮らしを描いた。酪農や野菜作りで協働する農場の人々。そこからの独立を思い悩む若い夫婦。機械を使わずに自分の手で作物に向き合う熟年

夫婦。食卓を囲む若い夫婦が笑う。「貧乏でも食べ物がいっぱいある豊かさ」

「貯金はないけど、薪(まき)はたくさんある」。そんな素朴でけなげに生きる農家の姿を丁寧に描いた。映画制作は人材や資金繰りに苦労し、中断を迫られるなど波乱の連続だった。しかし、撮影と編集に7年の歳月を費やし、納得した映画が撮れたという、その表情は晴々としている。

「農家が映画作りに参画し、自分たちで楽しんでいのが印象的。映画作りを通じて、人との有機的な結び付きが深まった。若者がどう感じるか関心がある」という。

8月22日まで、東京・ポレポレ東中野で公開中。